

本人・家族のための遺産相続の相談に関するパターン

細谷 綾乃 行政書士ほそたに事務所
堀ノ上 千恵子 行政書士堀ノ上千恵子事務所
細谷 泰夫 Agile Tour Osaka Committee

アブストラクト

遺産相続は誰もが自分自身の問題として実行しなければならない事であり、事前の遺言作成や、信頼できる専門家との関係構築などの事前の準備をしっかりと実施することで、スムーズな実行や不安の軽減に繋がる。しかし、実際には自分自身の問題として捉えずに準備や心構えがないうまま、余命が短いなどの状況に直面してしまうことが多く、限られた時間のなかで、本人や家族が納得できる遺産相続に辿り着くことは困難である。本論文では、余命宣告を受けた本人やその家族が、少しでもスムーズに納得できる遺産相続に辿り着くための大きな助けとなる専門家への相談に着目したパターンランゲージを提案する。

1. はじめに

遺産相続は誰もが自分自身の問題として実行しなければならない事であるため、年齢に関係なく、自分自身の問題として捉え、心身が健康な内に遺言書の作成や専門家との信頼関係の構築などの事前の準備を実施しておくことが重要である。しかし、実際には遺産相続を自身の問題として捉えずに、余命宣告を受けるなどにより、急に自身の遺産相続の問題に向き合わなければならなくなるケースが多い。そのような状況において、限られた時間の中で、本人・家族が納得する遺産相続に辿り着くことは困難である。一方で、遺産相続に関しては、行政書士、弁護士などの専門家に適切に相談することが大きな助けになるが、短時間で本人が自身が信頼できる専門家に辿り着き、相談することは難しい。そのため、本論文では、余命宣告を受けた本人が短時間で自身が信頼できる専門家に辿り着き相談することができるためのパターンを抽出し提案することにより、限られた時間の中での遺産相続の問題解決に寄与する。

2. パターン一覧

本論文にて提案するパターンの一覧を以下に示す。**現実を突きつける(2)**、**より信頼できる判断(3)**、**専門家との答え合わせ(5)**は家族や友人など本人の身近な人のためのパターンであり、それ以外のパターンは本人のためのパターンである。

No	パターン名	要約
1	身近な人への相談	一人で抱え込まずに身近な家族あるいは友人に相談してみる。
2	現実を突きつける	前に進むために、現実を突きつける。
3	より信頼できる判断	より信頼できる別の病院に検査してもらい納得できる診断をしてもらう。
4	自分なりの情報収集	残された時間で何をしなければならないか自分なりに情報収集する。
5	専門家との答え合わせ	自分で調べた情報で出した結論に固執してしまっている人に対して、専門家と答え合わせをすることを薦めることで、軌道修正を行う。
6	無料相談	市町村で開催している無料相談に参加し、専門家に相談する。
7	相談の準備	短時間の相談時間を有効にするために事前に準備をする。
8	依頼すべき理由	専門家に依頼すべきかどうかを判断するために、専門家に依頼すべきかどうかとその理由を聞く。
9	専門家の選択肢	専門家にも行政書士、司法書士、弁護士など状況によって最適な選択肢があることを知る。
10	福祉専門家への相談	福祉専門家に自身の状況を相談することで残された時間の生活をどうしていくか良いかアドバイスをもらう。
11	医師への相談	自身のこれからの治療方針について医師に相談する。

No	パターン名	要約
12	保健所への相談	医師の治療方針に納得がいけない場合には保健所に相談する。

3. パタン関連図

パタン同士の関連を示す。図における矢印はパタンの適用順序を表す。

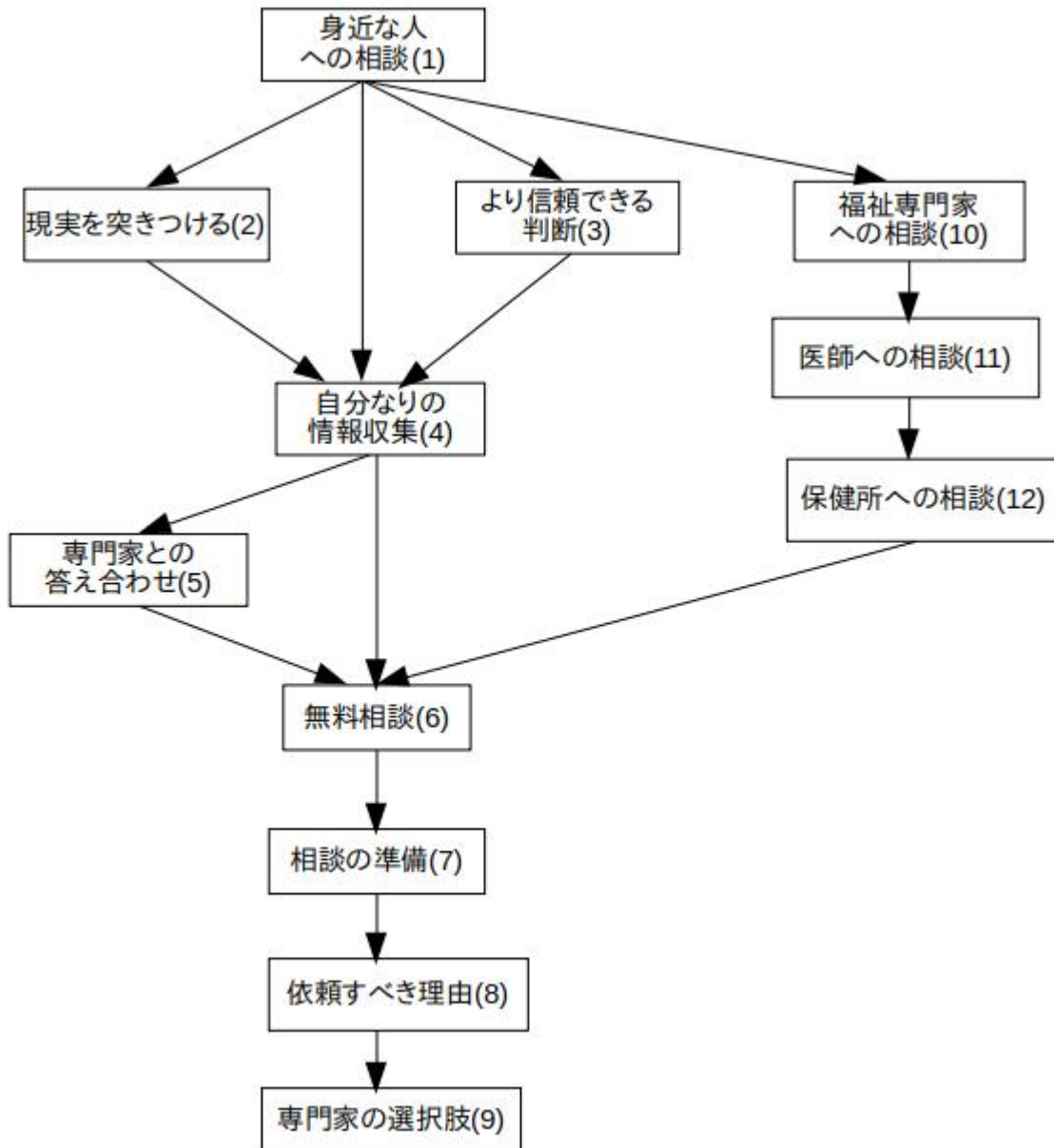


図 1 パタン関連図

4. 事例

遺産相続に関するパターンを理解するための事例を紹介する。

4.1 さくらの事例

さくら（70才）は医師から末期ガンであると伝えられた。さくらには40才の同居の長男鈴鹿と35才の娘の花がおり、花は結婚して夫の龍と12才の孫の風花と一緒に他の街で生活している。夫には、20年前に先立たれている。

さくらは、末期ガンでこのままだと半年の命であると医師から伝えられたが、まだ現実を受け入れることができない。鈴鹿や花に言うこともできずに一人で悶々と「どうして私が・・・」という気持ちで隠れて泣いて過ごしていた。

さくらは、一人悩む日々を過ごしていたが、米国在住の友人のベガが来日するという事で2人で会うことにした。ベガは親の仕事のために高校時代を日本で過ごしており、さくらとは高校の同級生で、気が合った2人は親友になり、手紙や最近はメールでもやり取りをしていた。

ベガと一緒に食事をして近況を話した。せっかく会ったのに暗い気持ちにさせてはいけないと思い、明るく振る舞ったが、ベガから「さくら、何か悩んでる？」と聞かれて末期ガンの告知を受けたことを打ち明けた。

ベガは、さくらの話を聞いてくれた。特に何をすべきだというようなことは言わずに現実として受け入れられない気持ちに寄り添ってくれて、いつでも話を聞くからといってくれた。さくらは、気持ちがとても気持ちが軽くなった。【身近な人への相談(1)】

さくらは、ベガにメールでやり取りするようになった。その中でベガから「家族には言っているの？」と聞かれた。子供達がどんな反応をするのかが怖くて、さくらはまだ子供達に打ち明けることができていなかった。

ベガにまだ子供達に打ち明けていないと言うと、「黙っていることは彼らにとってちっとも良いことじゃない。家族が大切ならちゃんと打ち明けるべきだ」と言われた。今まで、さくらは自分が家族のことを心配して黙っていると思っていた。夫が亡くなる前、夫はさくらに余命が短いと言われたことを打ち明けてくれた。もしあのとき、夫が打ち明けてくれず隠されていたらどう思っただろうか？と思い家族に打ち明けることを決意した。【現実を突きつける(2)】

さくらは、花に連絡し会いに行き、医師にガンを告知されて余命が半年であることを打ち明けた。

さくらは、正直にまだどうしたら良いか判らないと今の心境を話した。花は母の話聞いて動揺した。事が事だけにどうしたらいいかわからなかったが何か力になりたいと思った。夫の龍に相談すると、とても信頼できる医療機関と繋がりがあり、そこで受診するように薦められた。花はさくらとその医療機関と一緒にいくことにした【より信頼できる判断(3)】

さくらは花と一緒に龍から紹介された医療機関で詳しい検査をした。医師は、さくらが患っているガンに関する第一人者が担当してくれた。医師からは確かに余命半年であるというのをおかしくないが、現在開発されている新薬の臨床の条件にあてはまりそうだから、新薬を使ってみないかと薦められた。

新薬を使っても、命のリスクが高いことには違いはない状況だが、さくらは少し希望を持つことができた。

さくらは、少し気力が出てきて、自分が死んだときのことを考えられるようになった。治療がうまくいく可能性もあるが、半年で死んでしまう可能性も十分にある。治療を受ける以外にも残された時間で何をすればいいのだろうかと考えた。さくらは、街の大きな書店に足を運んでみた。

書店では遺産相続に関するコーナーがあり、さくらは色々な書籍を手にとってみた。

自分なりに情報収集してみようと思い、何冊かの本を購入し、しっかりと読んでみることにした。

書籍を読むと、遺産相続について考えるのは、決して後ろ向きなことではなく、家族が幸せであるために考えておくことが必要であると思えるようになった。死んでしまうリスクは高いままだが、しっかりと後のことに備えた上で、治療を頑張ることをさくらは決意した。【**自分なりの情報収集(4)**】

さくらは、鈴鹿にも病気のことを打ち明け、自分の決意を伝えた。鈴鹿も動揺していたが、さくらの決意を受けて、一緒に頑張ろうと言ってくれた。それから、さくらは書籍だけではなくインターネットも使って、遺産相続について調べるようになった。

インターネット上には、多くの情報が載っていた。鈴鹿はさくらから話を聞いていたが、インターネット上の情報には信頼できないものも多いことを知っており、ちゃんと専門家に任せた方がいいのでは？と感じていた。さくらにそれとなく言ってみても、「自分で調べてわかるから問題ない」と言われてしまった。鈴鹿は、さくらの親友であるベガにメールを送り相談してみた。

鈴鹿から相談を受けたベガは、さくらに連絡を取った。さくらは前の意気消沈した状態に比べると気力があるのが判った。さくらは、自分がこうだと思っただけでなかなか頑固な性格だとベガは長い付き合いでわかっていたので、「さくらが調べた内容が正しいことを専門家に見てもらって答え合わせするといいいんじゃない？」とアドバイスした。そう言われると、さくらも答え合わせを試みたい気持ちになり、専門家に相談してみようかと思った。【**専門家との答え合わせ(5)**】

さくらは専門家に相談しようと思ったが、これまでの生活で法律の専門家にお世話になったことはなく、どうしたら良いかわからなかった。そうすると花が「市の公報とかに無料相談について載っているはずだから、申し込んでみたら」と言ってくれた。今まであまり気にとめていなかったが、市の公報をよく見ると、定期的に市民向けの法律の無料相談を開催しているようだった。さくらは無料相談会に申し込んでみた。【**無料相談(6)**】

さくらは無料相談を受けることを専門家への相談を薦めてくれたベガに連絡した。ベガからは、限られた時間で聞きたいことを聞けるように、事前に準備するといいいよと言われた。さくらは、家族関係や資産、病状などの事実や、自分がどうしたいと思っているかを説明できるように準備することにした。【**相談の準備(7)**】

さくらは無料相談で専門家に相談を試みた。相談をした結果、特に農地に関しては整理するにしても自分達で手続きをするのは手間がかかりそうだとわかった。

また、相談している中で、夫が亡くなった際にちゃんと相続の手続きができていない資産があることがわかった。さくらは、専門家への相談で、自分が調べていたこと以外のことも知ることができたが、同時に自分で手続きできるか、専門家に依頼すべきかどうかがいわからなくなった。

周りの友人の話聞いても、専門家に依頼してよかったという話もあるし、とてもお金がかかったという話も聞く。自分で考えてもわからなかったので、専門家の事務所に連絡し、一度相談することにした。専門家からは、自分でも手続きできないことはないけど、依頼してもらった方がスムーズだろうと言われた。さくらは、「ご自身が私の立場だったら依頼されますか？」と聞いたら、「自分だったら依頼する」とのことだった。「その理由を教えてください」と聞くと専門家は理由を答えてくれた。今回の案件は、家族の仲もよく紛争になるリスクは低そうだと思うが、他人に貸している農地の相続については、農地特有の手続きがあり、現地にも赴く必要があり負担になるだろうとのこと、また夫が亡くなった際に手続きしていなかった資産があるが、そもそも夫の親が亡くなった時の手続きも実施していないようなので、夫の親、夫の相続から実施する必要があり自分で実施するのは難しいだろうということだった。【**依頼すべき理由(8)**】

さくらは、相談した専門家に、「遺産相続は弁護士さん、行政書士さんなど実施されていますが、選び方に基準があるんですか?」と聞いてみた。報酬に違いがあることはわかるが、何が違うかがわからなかった。

専門家は、「私は行政書士で、行政書士は司法書士や税理士などの先生と協力して仕事をし、依頼いただく方に対する窓口になりワンストップサービスを提供します。でも、紛争解決の対処は職務上実施することができません。紛争リスクが高いときは弁護士の先生に依頼された方が良いです。」と教えてくれた。【専門家の選択肢(9)】

さくらは専門家の話を聞いて、遺産相続については依頼することにした。そして自身は残された期間、治療にできるだけの力を注ぐことを決意した。厳しい状況には変わりはないが、さくらはしっかりと前を向いて進み始めた。

5. パタンの説明

以下にそれぞれのパタンについて説明する。

5.1 「身近な人への相談」

5.1.1 要約

一人で抱え込まずに身近な家族あるいは友人に相談してみる。

5.1.2 状況

余命宣告等により自分の余命が短いことを知ってしまった。

5.1.3 問題

事実だと受け入れることができず、一人で悩んでしまい前に進むことができずに時間だけが過ぎてしまう。

5.1.4 フォース

自分の余命が短いという事実を認めたくない。
相手もショックを受けるので、確実だと思えるまで相談したくない。

5.1.5 解決方法

一人で悩んでいても、前に進むことは難しいので思い切って家族や友人など身近な人に相談してみる。

5.1.6 結果状況

家族や友人など身近な人に相談することで、自分に今起きていることを整理することができる。身近な人から助言をもらうことにより、前に進むために何をしなければならぬかを考えるキッカケになる。

5.1.7 使用例

末期ガンの告知を受けたさくらは家族にも病状を言えずに一人で悩んでいた。余命が短いことを受け入れることができずに毎日一人で泣いて過ごしていた。このような状況が続くと、限られた時間を前に進むこともできずに過ごしてしまう恐れがある。さくらから相談を受けた親友のベガは、さくらに寄り添ってその話を聞いてくれた。具体的なアドバイスをもらうことはなかったが、自分の状況や気持ちを話すことによって、さくらはの心が随分軽くなった。このように一人で抱え込んで悩むよりは思い切って身近な人に相談することで、前を向くキッカケを作ることができる。

5.2 「現実を突きつける」

5.2.1 要約

前に進むために、現実を突きつける。

5.2.2 状況

家族など身近な人が余命宣告を受けたが、本人が現実として受け止めることができない。

5.2.3 問題

現実から逃避してしまい効果のないことをしてしまい時間だけが過ぎてしまう。

5.2.4 フォース

自分の余命が短いという事実を認めたくない。

5.2.5 解決方法

遺産相続などの問題を放置されると残された人がどれだけ困るかなどの現実をはっきりと伝える。

5.2.6 結果状況

限られた時間で自分が生きているうちに、残された人のためにしなければならないことがあることに気づき、前に進み始めてもらう。

5.2.7 使用例

さくらは、未だに家族に自分の病状について話せずにいた。このままの状況が続くと時間だけが過ぎてしまい何も良いことはない。さくらの親友のベガは、家族が大事ならちゃんと状況を言った方が良いとはっきりと伝えた。このように現実をはっきりと突きつけることは、本人が前に進むキッカケとなる。

5.3 「より信頼できる判断」

5.3.1 要約

より信頼できる別の病院に検査してもらい納得できる診断をしてもらう。

5.3.2 状況

家族や友人に余命が長くないと相談を受けたがどうしたらよいかわからない。

5.3.3 問題

事が重大であるため、どんなアドバイスをすれば良いかわからない。

5.3.4 フォース

本人にとって、何か助けになるようなアドバイスをしたい。

5.3.5 解決方法

より詳しい検査ができる医療機関での診断を薦めてみる。

5.3.6 結果状況

別の病院でも検査してもらうことにより、最初の余命宣告の信頼性を判断することができる。最初の病院と同じ判断であったとしても、余命が短いということを認めるための材料となり、前に進むキッカケになる。

5.3.7 使用例

花は母のさくらから末期ガンであると告白されたが、事が事だけに何を言っていかなかった。なんとか母の力になりたいと思った花は、夫の龍に相談した。花も母の余命が短いということを、現実として受け入れがたいだろうと感じた龍は、より確実な診断ができる医療機関を紹介することにした。このようにより信頼できる医療機関で診断を受けることにより、その結果が良い悪いに関わらず状況を現実として受け入れるキッカケになる。

5.4 「自分なりの情報収集」

5.4.1 要約

残された時間で何をしなければならないか自分なりに情報収集する。

5.4.2 状況

自分の余命が長くないということを認識したが、残された時間で何をすれば良いかわからない。

5.4.3 問題

何をすれば良いかわからないと、何もできないまま時間だけが過ぎてしまう。

5.4.4 フォース

何をやらなければならないかがわからないと行動に繋がらない。

5.4.5 解決方法

書籍やインターネットなどを利用して、遺産相続のために何をしなければならないかを情報収集する。

5.4.6 結果状況

情報収集をすることで、残された時間で何をしなければならないかを考え始め、自分の状況を受け入れ前に進むことができるようになる。

5.4.7 使用例

さくらは、残された時間で何をすれば良いかわからない。何か行動をしたいと思ったさくらは、遺産相続について書籍やインターネットで情報を収集し始めた。情報収集をしていくなかで、さくらは遺産相続について考えることが、家族の幸せのために必要であると思うようになった。このように書籍などの情報収集を通じて、自分の状況を客観的に捉えて現実を受け入れることによって前に進むことができるようになる。

5.5 「専門家との答え合わせ」

5.5.1 要約

自分で調べた情報で出した結論に固執してしまっている人に対して、専門家と答え合わせをすることを薦めることで、軌道修正を行う。

5.5.2 状況

本人が自分で調べた情報で出した誤った結論に固執してしまっていて聞く耳を持ってくれない。

5.5.3 問題

誤った方向に進んでしまい限られた時間を無駄にしてしまう。

5.5.4 フォース

一度正しいと信じてしまった結論を変えるのは難しい。
自分の考えが正しいことを専門家に認めてもらいたいという意識がある。

5.5.5 解決方法

家族など周りの人から、念のため今出している結論が正しいことを専門家に確認してもらうように薦める。

5.5.6 結果状況

専門家の意見を聞くことにより、誤った方向から軌道修正を行うことができる。

5.5.7 使用例

さくらは情報収集を熱心してしていたが、インターネットに書かれている情報の中には事実と異なる内容もあり、長男の鈴鹿は母が間違ったことを信じ込んでしまわないか心配していた。鈴鹿から相談を受けたさくらの親友のベガは、頑固なさくらの性格を考へて、「調べた内容を専門家と答え合わせをしてみたら？」とアドバイスをした。このような身近な人が本人に対して専門家の力を借りるように促す場合に、本人の意見を否定しないことが重要である。

5.6 「無料相談」

5.6.1 要約

市町村で開催している無料相談に参加し、専門家に相談する。

5.6.2 状況

残された時間で何をすれば良いかを具体的に知りたいが、ネットや書籍で得られる膨大な情報の何が自分に合っているのかがわからない。

5.6.3 問題

具体的に何をしなければならないかがわからないとアクションにつなげることができずに時間が過ぎてしまう。

5.6.4 フォース

専門家に相談するのは敷居が高いと思い込んでいる。

5.6.5 解決方法

市町村で開催されている無料相談会に参加することにより、専門家に自分の現状を話して何をしなければならないか教えてもらうことができる。例として大阪府箕面市では行政書士や弁護士による無料相談が定期的開催されている。[2]

5.6.6 結果状況

専門家の視点で自分が状況における解決すべき問題点や、やらなければならないことが明確になり、今後のアクションの指針になる。

5.6.7 使用例

さくらは専門家に相談することにしたが、どれだけお金がかかるかもわからないし、直接専門家の事務所を訪れるのが不安だった。さくらの長女の花から市の公報に無料相談会の情報が載っているとアドバイスを受けてさくらは無料相談会への申込みを決めた。ほとんどの人にとって、専門家への相談は敷居が高く感じて不安であるが、市町村などの公共機関が主催する無料相談は安心して受けることができる。

5.7 「相談の準備」

5.7.1 要約

短時間の相談時間を有効にするために事前に準備をする。

5.7.2 状況

無料相談会に参加するが、自分の現在の状況を説明できるように整理していない。

5.7.3 問題

相談の最初は本人から状況をヒアリングするところから始まるため、自分の状況を説明するのに時間がかかってしまうと、問題解決のためのアドバイスをもらうための時間が短くなってしまう。

5.7.4 フォース

専門家に相談をしたことがなく、事前に何をしていくべきかわからない。

5.7.5 解決方法

家族関係、資産、病状などの事実や自分がどうしたいかの希望を事前に整理して説明できるようにしておくことで、相談時間を有効に使うことができる。

5.7.6 結果状況

無料相談の限られた相談時間で自分の問題やその解決のための有効なアドバイスを受けることができる。

5.7.7 使用例

さくらは無料相談を受けることにした。それを聞いた親友のベガは、さくらに家族関係、資産、病状など基本的な内容を整理して説明できるようにしておくようにアドバイスをした。専門家が初めて相談を受けるときに必ず聞く内容を整理しておかないと、肝心な相談したい事かけられる時間が少なくなってしまい相談の目的を達成することが難しい。事前の情報整理を実施することで、限られた相談時間を有効にすることができる。

5.8 「依頼すべき理由」

5.8.1 要約

専門家に依頼すべきかどうかを判断するために、専門家に依頼すべきかどうかとその理由を聞く。

5.8.2 状況

無料相談で専門家に自身の問題とその解決方法についてアドバイスを受けたが、専門家に依頼すべきかどうか判断することができない。

5.8.3 問題

専門家に依頼しないと解決が難しい状況だと、依頼せずに進めることで遺産相談の問題解決ができないまま時間が経過してしまう。

5.8.4 フォース

専門家に相談したらお金がかかるので必要なければなるべくお金をかけたくない。

5.8.5 解決方法

専門家に相談し、率直に専門家に依頼すべきかどうかとその理由を聞く。

5.8.6 結果状況

依頼すべきかどうかとその理由を知ることにより、専門家に依頼すべきかどうか判断することができるようになる。

5.8.7 使用例

さくらは専門家に依頼すべきかどうか判断できずに迷っていた。なるべく家族に残すお金を消費したくない反面、自分でできるかどうか不安だった。さくらは専門家に対して率直に自分だったら依頼する状況かと判断の理由を聞いてみた。このような質問に真摯に答えてくれない専門家には依頼する必要はなく、納得できる回答をもらえて信頼できる専門家の意見を聞くことが重要である。

5.9 「専門家の選択肢」

5.9.1 要約

専門家にも行政書士、司法書士、弁護士など状況によって最適な選択肢があることを知る。

5.9.2 状況

遺産相続についての依頼先となる専門家にも複数の職種があるが、自分にとって最適な依頼先がどこかわからない。

5.9.3 問題

専門家の選択によっては、必要以上に費用がかかってしまう場合がある。

5.9.4 フォース

自分の状況に合った専門家に依頼したい。

5.9.5 解決方法

専門家の選択の観点としては、得意分野、費用などがある。下記に依頼の候補となる専門家の職種と選択の観点を示す。（職種、得意分野について[1]は参考とした。）

職種	得意分野	費用(数値が高いほど費用が高い)	紛争解決の対処
行政書士	各職種との窓口(ワンストップサービス)書類作成	2	不可
司法書士	不動産登記	1	制限あり(訴訟額 140万円以下)
税理士	税金	3	不可
弁護士	紛争解決	4	可

5.9.6 結果状況

自分の状況に合った専門家の選択肢を知ること、適切な費用で専門家に依頼することができる。

5.9.7 使用例

さくらは専門家に依頼することに決めたが、行政書士、司法書士、税理士、弁護士など遺産相続に関わる専門家は複数ありどのように選択すれば良いかわからなかった。さくらは専門家に率直に判断基準についてアドバイスを求めた。専門家にはそれぞれ職種によって得意分野や費用、法律上実施可能な業務が異なっている。それぞれの職種の特徴を知ることによって、自分にとって一番良い選択をすることが可能となる。

5.10 「福祉専門家への相談」

5.10.1 要約

福祉専門家に自身の状況を相談することで残された時間の生活をどうしていくか良いかアドバイスをもらう。

5.10.2 状況

自身の余命が長くないことを知ったが、生活が困窮しており残された時間の生活をどのようにすれば良いか見通しが立たない。

5.10.3 問題

生活が困窮している状況で治療や自身の遺産相続（負債も含む）の問題を解決するための行動をすることが困難。

5.10.4 フォース

生活に困窮していても、自身で抱え込んでしまい他に相談する敷居が高い。

5.10.5 解決方法

地域の社会福祉協議会などで福祉専門家に相談することで生活困窮の状況を立て直すためのアドバイスを受ける。

5.10.6 結果状況

福祉専門家のアドバイスを受けることで、生活保護など残された時間の生活を立て直すための対策を進めることができる。

5.10.7 使用例

高齢者である一郎は、医師から末期ガンで余命が1年以内であると告知をされたが、借金を抱えていて生活に困窮している状況である。離婚した妻と息子がいるがもう長年連絡を取っていない。現在の状況では負債の整理や治療もまもらずに一人悩んでいた。地域の民生委員に相談したところ、社会福祉協議会で福祉専門家に相談するのが良いとアドバイスを受けた。福祉専門家に相談することで、まず生活を立て直すためのアドバイスを受けることができる。

5.11 「医師への相談」

5.11.1 要約

自身のこれからの治療方針について医師に相談する。

5.11.2 状況

余命宣告を受けたが、生活が困窮している状態なので治療がどうなるのか不安。

5.11.3 問題

どのような治療が必要で費用がどのくらいかかるのかなどが分からないと、自分がどうなってしまうのか不安なまま過ごさなければならなくなる。

5.11.4 フォース

生活に困窮している状態で適切な治療ができないのではないかと不安がある。

5.11.5 解決方法

まずは医師に現在に状況とそれを踏まえた治療方針について相談する。

5.11.6 結果状況

福祉専門家への生活面の相談と、医師への治療方針の相談で生活面、治療面の両方の問題解決を進める。

5.11.7 使用例

一郎は末期ガンの告知を受けているが、生活に困窮しており、もしかするとこのまま治療を受けることができないのではという不安がある。医師に生活状況を共有した上で治療方針について相談する。生活状況を共有することによって、実施不可能な治療となることはなく、医療機関から役所等の窓口に繋いでもらえる可能性もある。

5.12 「保健所への相談」

5.12.1 要約

医師の治療方針に納得がいけない場合には保健所に相談する。

5.12.2 状況

生活が困窮している状況で医師に治療方針を相談したが、治療方針が適切か不安がある。

5.12.3 問題

不適切な対応のまま治療を続けてしまうと、病状が悪化する恐れがある。

5.12.4 フォース

医師の治療方針が適切かどうかは自身では判断することが難しい。

5.12.5 解決方法

保健所に相談することで、現在の自分の状況に対して医師の治療方針が適切かどうかのアドバイスを受けることができる。例として大阪府では保健所における医療相談窓口をホームページ上で掲載している[3]。

5.12.6 結果状況

相談の結果によっては医療機関を変更するなどの対処をすることができ、適切な治療につなげることができる。

5.12.7 使用例

一郎は医師からの治療方針に対して疑問をもっているが、医師に質問をしても納得いく説明をしてくれない。一郎は医療相談についてインターネットで検索したところ、保健所に医療相談窓口があることを知り、相談してみることにした。このように保健所には医療相談の職務があるので、相談によって適切な治療につなげることができる場合がある。

6. 結論と今後の課題

以上から、事前の準備が十分でない状況で余命宣告等で自身の遺産相続の問題に直面した際に、専門家の手を借りてなるべく早く問題を解決するために、「本人・家族のための遺産相続の相談に関するパターン」が活用できることを事例により示した。一方で、「本人・家族のための遺産相続の相談に関するパターン」には、以下の課題が存在することについても認識している。

6.1 遺言等の事前準備の浸透

本論文で提案した「本人・家族のための遺産相続の相談に関するパターン」は、余命宣告を受けるまで遺産相続の事前準備を実施していなかった場合を対象としているが、遺言等の事前準備を実施しておくことにより、遺産相続をスムーズに進めることが可能となり、本人や家族の不安も軽減することができる。しかし、心身が健康な状況では遺産相続を自身の問題として捉えることができず、事前準備の実施が浸透しているとは言い難い状況である。今回はより緊急性が高く、該当者も多いと考えられる遺産相続に関するパターンを提案したが、今後、より重要である遺言や専門家との信頼構築などの事前準備の浸透に寄与するパターンへの拡張が必要である考える。

6.2 専門家による支援のパターン抽出

本論文で提案したパターンは本人やその家族が利用することを想定しているが、支援を依頼される専門家が利用する遺産相続を支援するためのパターンを抽出し整理することにより、遺産相続の問題を抱える人が自分の希望にあった支援をスムーズに受けることができる可能性が高まると考える。

参考文献

1. 東、祖父江. 2014. *相続コンサルタントの実務マニュアル* (中央経済社)
2. 箕面市ホームページ 相談 <http://www.city.minoh.lg.jp/kurashi/soudan/index.html>
3. 大阪府ホームページ 保健所における医療相談窓口
http://www.pref.osaka.lg.jp/iryu/iryooanzen/iryousoudan_madoguci.html